

書 評 Book Review

Zoltan Papp: Obstetric Genetics

Akademiai Kiado, Budapest, xxv + 627pp., 1990, \$89.00

産科学の立場から遺伝学に興味を持ち、それをライフワークの一つと思い、ささやかな臨床研究を行ってきた一人として、最近ふっと思うことがある。それは、遺伝が生殖現象を介して現実のものとなるのならば、ヒト生殖をフィールドとする産科学において何故遺伝学の研究が余り進んでいないのだろうかということである。もちろん産婦人科学において遺伝学に関連した研究が全くなされていないわけではない。臨床的には、遺伝相談、羊水検査や絨毛検査、胎状奇胎や卵巣嚢腫の一つである類皮嚢胞腫の発生に関する遺伝学的検討など、興味深い研究が行われ成果を挙げてきた。しかし、遺伝学に関連した分野は産婦人科学において依然として極めて少数の研究者によって行われているに過ぎない。いわば研究者の層が極めて薄いのである。

これは産科学の歴史が長い間、分娩のみに関する学問であったからに他ならない。助産学であったと言ってもよい。本書の前書きで著者自身も述べているように「健康な子供を健康に産ませる、すなわち死なせたり不可逆的な障害を残さない分娩」が、産科学の目的であった。しかし完全ではないにしろ、この目的は達せられつつある。また、1.57 ショック（女子が生涯に産む平均の子供数を示す合計特殊出生率が1989年度に1.57にまで低下した）と言われるような、わが国の挙児数の著しい低下とそれを背景にした国民の動向は、健康な子供をどうやって妊娠するかという、さらに一歩進んだ目標を産科医に求めつつある。この動きは先進国にのみ見られる現象であって、開発途上国ではなお産科学に遺伝学が入り込む余地は限られているかに見える。

このように、先進国にあっては産科医の側でも遺伝学に関心ではいられなくなってきているし、遺伝学の分野でも臨床から離れて純然たる研究だけという訳にはいなくなってきているのではなかろうか。そのような時代を背景に本書は書かれている。そして産婦人科医が書いた遺伝学の本としては極めて広範囲で、かつ、このような広範囲な分野をカバーしているという点では私が知る限り最初のものである。

本書は80章という膨大な構成でなっている。最初から11章までは臨床遺伝学から始まってDNA診断についてが書かれており、12章からは羊水や羊膜の病理、羊水過多、羊水細胞の培養、超音波断層法による検査や、羊水検査・絨毛検査が、31章からは遺伝相談やそれに関する心理的な要因について、41章からはさまざまな遺伝性疾患についての記載が、また69章からは風疹やクラミジア、トキソプラズマなどの子宮内感染による先天異常が記載され、最後の80章は周産期に生じる低酸素症などによる障害についてが記載されている。かなり膨大な領域について記載されており、すべてが一人で書かれたかどうか正直言って疑問になってしまうぐらいである。しかし前書きの中で著者自身が「各章の構成は論理的に次々の章へと読み進められるようにしている」と述べているように、一見乱暴に並べられた各章は実にあざやかに構築されている。また、各章で見られる豊富な症例の写真は、20年余にわたる著者自身の医師としての集大成がこの書であることを示している。産科における遺伝学の百科事典のように思えるほど膨大な内容を含んだ書でありながら、この著者の思想が本書の中のいたるところに明確に示されている。

産婦人科医にとってみれば、本書は遺伝学の産科学への関与を知る上で参考になるし、産科学以外の遺伝学に興味のあるものにとってみれば、遺伝学とヒトとの接点である産科学において現在何が考えられ、どんな治療が行われているかを知る上で大いに参考になる。臨床における遺伝学の現況を知る上ではたいへん参考になる書である。

(佐藤孝道 虎の門病院産婦人科)